県内隅々を巡る、その情熱に導かれて農協育つ

宮城県農業協同組合中央会第三代会長
宮城県信用農業協同組合連合会会長

袋　光雄

【ふくろ　みつお】

1906（明治39）年	9月17日、北方村（現登米市）に生まれる
1926（大正15）年	北方村産業組合に奉職
1946（昭和21）年	北方村村長
1948（昭和23）年	北方村農業協同組合組合長 宮城県信用農業協同組合連合会専務理事
1954（昭和29）年	宮城県信用農協連会長
1955（昭和30）年	宮城県共済農業協同組合連合会会長
1965（昭和40）年	農林省米価審議会委員
1966（昭和41）年	宮城県農業協同組合中央会第三代会長
1995（平成７）年	3月22日死去

仮住まいから朝草刈りへ出発

袋光雄はその朝も仮寓の床のなかで目を覚ました。未明の空は暗く、星が弱い光を放っていた。

身支度を整えていると、近くに下宿する部下が袋を迎えに来た。車に清酒とモナカを積み、〝朝草刈り〟に出発する。県内の農協組合長を訪問し、貯蓄増強運動や共済事業への協力を要請するためだ。朝草刈りは、朝早く起きて出かけることを農作業になぞらえた呼称で、清酒とモナカは訪問先への手土産だった。

袋が堤通り（現上杉一丁目）の宮城県養蚕農業協同組合連合会の一室を仮住まいに定めたのは、一九五五（昭和三〇）年、宮城県信用農業協同組合連合会（以下県信連）と宮城県共済農業協同組合連合会（以下県共済連）の会長を兼務するようになってからだ。

県信連は設立から七年、県共済連は発足したばかりで、体制も基盤もぜい弱だった。任務をまっとうするには寸暇を惜しまず働かなければならないと考えての単身赴任生活だった。

実家で農業を手伝っていたころ、霜を踏んで野良仕事に行き、満天の星を仰ぎながら帰路につくことが何度もあった。早起きはまったく苦にならない。「時間は有効に使え」が信条でもあった。自宅のある迫町（現登米市）には東北本線の駅があるが、

通いでは早朝から仕事に励むことができない。袋は、土曜日には車で迫町に帰宅し、日曜日には仙台に戻る日々を己に課した。粘り強さが袋の人生を貫く流儀だった。

夜も昼も時間を惜しんで働く日々

袋の生家、三浦家は、自作地のほかに小作地も耕す、いわゆる〝手作り地主〟で北方村（現登米市）でも指折りの耕作農家だった。

北方村農業補習学校を卒業後は当然のように農業に従事していたが、二〇歳のとき北方村産業組合佐々木庄太郎組合長の懇請を受け同組合に奉職する。二二歳で袋宮子と結婚して袋姓に変わり、才気を買われて二七歳で産業組合中央会宮城支会の指導員に抜擢される。

当時、東北の農村は昭和恐慌の直撃を受けて農産物や米の価格が下落し、苦境に陥っていた。産業組合は疲弊した農村を建て直すため、全農家加入や事業量拡充などを柱とする「産業組合拡充五か年計画」を策定、実践。袋も、町村をまわって産業組合の設立を呼びかけるなど、熱心に組合運動の推進にあたった。

まだ二七歳だったが若い人たちに人望があり、よく一緒に横山不動尊参りをしたという。「徹夜してでも家業と組合の仕事を済ませ、青年たちにはその苦労を見せないで付き合っていた」と、当時の袋を知る者が語っている。

日中戦争、太平洋戦争をくぐり抜けたあと、袋は四〇歳で北方村村長に就任。昭和二三年には北方村農業協同組合の初代組合長に就き、村長との兼務で職責を果たす。

ちょうど戦後の食糧難の時代で、農家は強制的に米を供出させられていた。台風で稲作が打撃を受けるなか、袋は供出米の割り当て完遂という難しい仕事に取り組む。夜は役場に泊まり込み、昼は農家を訪問して供米の督励をする毎日だったという。ここが勝負と定めたときは身を粉にして働く、そんな袋の一途さが垣間見える。

さらに組合長就任と期を一にして、袋は県信連の初代専務理事に選任される。一人で二役も三役もこなす奮闘ぶりに袋の評価は一層高まった。

県信連の礎となった農家資金対策運動

一九三万町歩とは、どのぐらいの広さになるのだろう。終戦直後、ＧＨＱ（進駐軍）の指示で行われた農地解放は、農業史を塗り替える大改革だった。

昭和二〇年から二五年にかけて国所有の土地を含め一九三万町歩もの農地が小作農家へ売り渡され、多くの自作農を生み出した。封建的な地主制度を解体し、民主的な農村社会を目指すことが目的だった。

しかし袋は、自作農になった農民の生活が実際は天災や不況でひっ迫していることを知っていた。

「農家の暮らしを良くする決め手は米の生産力を高め、無駄を省いて貯蓄を進めていくことにある」

秋の米代金で借金を精算する習慣をあらため、自分で計画的に資金をまかない、災害にも備える。それが農業経営の安定につながる。そう確信していた。

県信連の専務に就いた袋は、「農家資金対策運動」（農協貯蓄増強運動）に取り組む。はじめに「備荒・たすけあい・納税準備・肥料・農機具・耕作・家畜・買い物・医療・婚礼」の一〇種の貯金を提案し、さらに「割増金付き定期預金」「一日皆貯金」など次々とアイディアを形にしていった。

県信連には農協から預かったお金を原資に、他の農協へ融資する組合系統金融の任務がある。

ところが県内の農協はどこも戦時中の債権処理や重税対策でゆとりがなく、一向に貯金は集まらない。貯金より融資が上回るオーバーローンの状況が続き、県信連自体も資金繰りに四苦八苦する有り様だった。

あるとき融資担当者が、農業手形の精算ができそうにないと農協への融資を断った。

「資金繰りの窮屈な時代でした。融資せずの措置をとったら、袋さんに呼び出され、〝系統金融はお互い苦しいなかで面倒見てやらなければダメなんだよ〟と叱られました」

袋の信念が伝わるエピソードである。

袋は「一日でも早く金融事業が円滑にまわるよう改善を図らなければならない」と、一層農家資金対策運動に力を入れた。「どうすれば貯蓄増強の周知徹底を図れるだろう、どうすればもっと理解が進むだろう」。必死にアイディアを絞り出す。

「宣伝にトラックを使おう」と思いつくとすぐ実行に移した。自分が経営する佐沼トラック株式会社からトラックを一台調達して横に横断幕を張り、蓄音機を鳴らして県内の農村を宣伝にまわらせた。後年はヘリコプターやセスナ機を飛ばして県内の農協を巡り、感激を持って迎えられている。

昭和二九年、県信連の会長に昇格した袋は、貯蓄督励の〝農協巡り〟に本腰を入れる。清酒二本やモナカの手土産はこのころからの習慣だ。

昭和三二年には「売り買いも貯金も共済もみな農協へ」と唱え、農協の役職員や青年部、婦人部総ぐるみの推進体制をつくって県下一斉に運動を展開した。

県信連八代目の会長大江富一郎は『農協一筋　袋光雄伝』のなかで「こうした積み重ねが基礎になって農協貯蓄のイメージアップが図られ、現在（昭和六三年）の七千億円の貯金高につながった」と袋の功績を讃えている。

賀川豊彦の教えを胸に取り組んだ共済事業

「渡辺、明日は四時半出発だよ」。袋から何度、そう声をかけられたことか。朝草刈

りと称する組合長宅訪問に随行するのは、共済事業の生き字引とも言われる渡辺小十郎だ。

「共済事業に腰をあげない組合長宅を訪問し、事業への協力を説いてまわった。実に熱心で馬力のある会長さんだと思った」と渡辺は言っている。

一九五五（昭和三〇）年、県共済連が設立された。県信連の二代目会長であり、宮城県農業協同組合中央会（以下県中央会）の初代会長を務めた齋藤圭助の尽力によるものだった。

組合金融は信連を窓口に一本化した方が良いと考えていた袋は思い切って会長選に出馬し、県共済連の初代会長に選任される。

「資金運用を巡って農協系統に混乱が起きてはならない。県信連と県共済連の会長を兼務すれば、事業を進めやすくなる」。そう熟慮してのことだった。

袋は、日本の協同組合運動の先駆者である賀川豊彦の思想に深く共鳴していた。賀川は、戦前から「保険事業なくして日本の協同組合は発展しない」と主張し、全国共済農協連合会の設立後は、自ら全国を歩いて農協が共済事業に取り組むことの必要性を訴えていた。

昭和二九年夏、袋は仙台に賀川を招いて共済事業の講演会を開催。その熱い思いに触れている。

「農家から出るお金は農家へ還元しよう」。農協共済の父と呼ばれる賀川の呼びかけ

に感動した袋は、農協組合長宅の訪問や農協での講演など精力的に仕事をこなし、共済事業の地盤を固めていった。

当時県内には二二〇前後の農協があった。早朝仙台を発ち、組合長宅を順繰りにまわっていく。しかも、昼の時間帯は県信連会長として貯蓄増強推進のための農協巡りにあてるようにしていた。まさに大車輪の活躍だった。

政策面では、当初の計画通り共済資金のうち積立掛金をすべて県信連預かりとし、これを原資に農家への還元融資に踏み切った。挙積高と積立準備金の割合を基準に農家へ還元融資する方法で、共済事業、組合金融、双方に効果をもたらした。

昭和三二年には無医村地域の不安を解消するため、各農協にはたらきかけ、東北大学附属病院との提携で一日農村巡回医療診療所を開設した。県共済連が巡回診療班を派遣し、農協がそれを受け入れるという方式だった。

袋が打ち出した政策は、創業期の共済事業の支えとなってその後の発展を促していく。

勤労農民の手で率いた農協運動

袋は幼年期に罹った小児まひの影響で左手が不自由だった。農作業ではその不自由さを負けん気と工夫でカバーし、懸命に働いた。

「俺の手を見ろ」。岩松清美（県信連五代目会長）はあるとき、袋から右手を差し出された。それは、「田打ちで鍛えた手だから事務屋のような手でない。勤労農民の手だった」。

米価運動ではいつも鉢巻き姿で先頭に立ち、食糧管理制度の堅持を訴えた。

大江は米価運動で上京した際の袋の姿を覚えている。「よれよれの服で我々を出迎えにきたことがあった。何日も東京に寝泊まりして家には帰ってなかったんでしょう。それほど米価運動で頑張っていた」。

農民の暮らしを良くしたい。その一念で農協運動をけん引してきた。

昭和四〇年には二年の任期で農水省（現農林水産省）の米価審議会委員となり、交渉成功の喜びも、挫折の無念も味わった。昭和四一年には連合会役員の完全兼務制（共通役員制）発足で、県中央会・連合会のトップである共通会長に就任し、手腕を振るった。

政策を遂行するため、ときには駆け引きや根回し、権力争いにも身を投じたが、部下への気配りを怠ることはなかった。

袋の自宅近くに観音寺という水に恵まれた集落があり、質の良いセリを産していた。袋はこのセリと、近郷の長沼湖で採れる小エビ、じゅんさいを年に二回、小包にして県信連と県共済連の主だった部下に配った。ずんだ餅会を開催して慰労することもあったという。組織を大切にし、人の労に報いることを重んじるリーダーだった。

県農協連共通会長引退後のある日。

「やあ、実家に帰ってきたような気持ちがするなあ」

農協ビルの一室に声が響く。職員がふり返ると袋の姿がある。

袋は会長職から身を退いた後も、たびたび農協ビルを訪れては、懐古談に興じた。仮寓のあった仙台と仕事の舞台となった農協ビルは心のふるさとだった。自宅のある北方にいても無性に仙台が恋しくなり、後輩たちに会いに駆け付けた。

袋の思いはまっすぐに、半生を過ごした県農協連へ向かっていた。

袋光雄、享年九〇歳。荒れた畑を耕すように、がむしゃらに農協の仕事に打ち込んだ人生だった。